

結核

第五卷 第七號

昭和二年七月二十四日發行

原 著

肺結核患者ノ血壓ニ就テ(臨牀的觀察第二報)

東京市療養所(所長田澤博士)

鈴木 佐 内

緒言

第一章 日時及び季節ト血壓ノ關係

第二章 既往症及び合併症ト血壓ノ關係

第一節 既往症ト血壓ノ關係

緒言

第二節 合併症ト血壓ノ關係

第三章 月經ト血壓ノ關係

第四章 豫後ト血壓ノ關係

綜括

余ハ臨牀的觀察第一報ニ於テハ主トシテ肺結核患者ノ血壓ニ關シ其ノ基礎的條件ニ就キ述ベタリ、而シテ本誌ニ於テハ肺結核ノ經過中ニ起ル血壓動搖ニ關シテ探查セル二三ノ結果ヲ報告セントス。

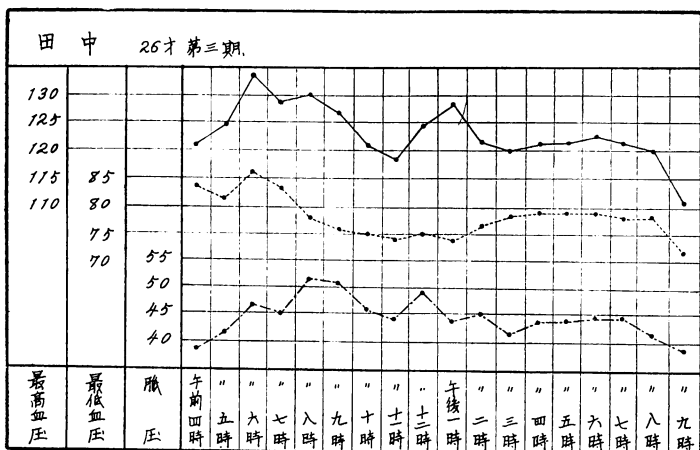
第一章 日時及季節ト血壓トノ關係

第一節 一日中ニ於ケル血壓動搖

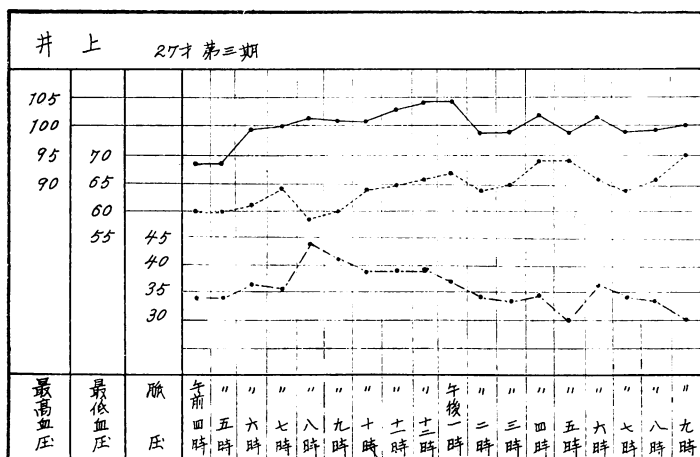
一日中ニ於ケル血壓價ノ動搖ハ、報告者ニ依リテ多少異ルモ一般ニハ晝間ニ於テ高位ニシテ、夜間毎ニ睡眠中低下スル

原 著 鈴木ニ肺結核患者ノ血壓ニ就テ

第一表 (第一例)



第一表 (第二例)

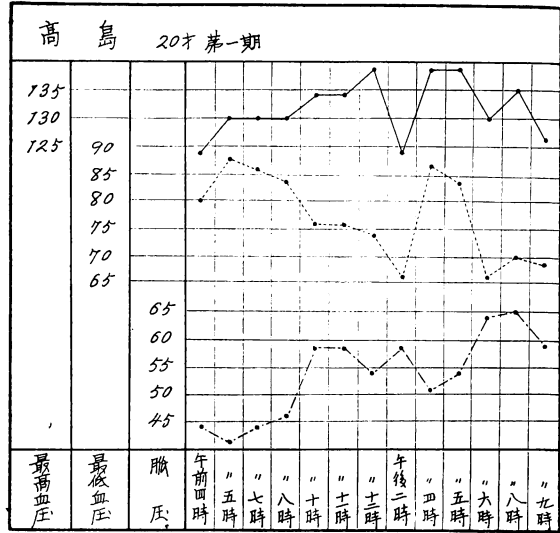


他ノ原因ニ依ルカ不明ナリト稱ス。

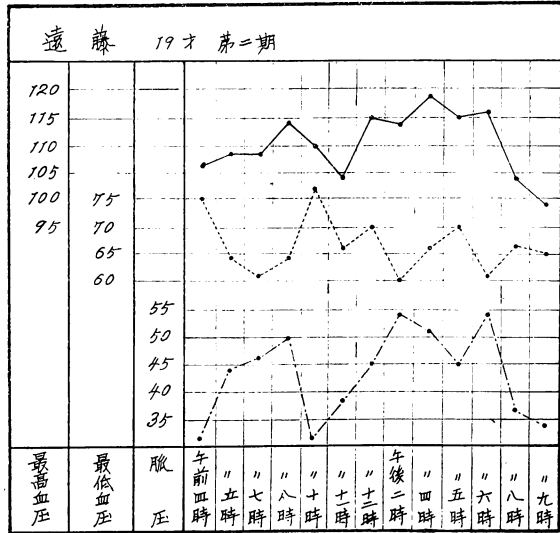
余モ亦此ノ一日中ニ於ケル血壓ノ動搖ヲ檢セントシテ成ル可ク詳細ニ測定ヲ試ミタリ。即チ四名ニ於テハ十三回乃至十八回ノ測定ヲナシ更ニ後章室溫ノ章ニ於ケル實驗例ニテハ併セテ夜間ノ觀察ヲモ試ミタリ。此ノ結果ハ、第一表ニ示ス如ク第一及第二例ハ一日中十八回ノ血壓測定ヲ行ヒタルモノニシテ、第三及第四例ハ十三回測定セル者ナリ。

モノトス。西山氏ハ五十二名ノ軍人ニテ、午前四時ノ起牀時及午後九時ノ就牀時トノ血壓ノ平均價ヲ求メ、前者ノ血壓ノ低キ事ヲ述ブ、眞野、林兩氏モ、早朝一般ニ低ク、午後三時ヨリ七時迄ハ消化作用ニ關係ナキモ、最モ高壓ヲ示スモノナリト稱ス。Schwitter氏ハ、肺結核患者ニテ一日中ノ最高價ナルハ一般ニ夕刻ナリト云フ。又川上氏ハ三名ノ肺結核患者ニテ、午前七時、正午、午後六時ノ三回ノ測定ヨリ血壓ノ日差ニ就テ報告シ、血壓ハ午後ニ於テ稍々高張ヲ示スガ如シ、然レドモ是或ハ體溫ノ上昇ガ血壓上昇ヲ伴フ生理的ニ來ル午後ニ於ケル體溫上昇ニ伴フ隨伴現象ナルカ、或ハ其

第一表 (第三例)



第一表 (第四例)



テ、測定上細心ノ注意ヲナスニ拘ラズ、常ニ多少ノ上下ヲナスモノニシテ、且ツ又是等ガ體溫ノ上昇或ハ食事等ノ諸事項ト一定ノ關係ヲ有スル如ク思惟スル事モ能ハザルナリ。

次ニ余ハ、後章室溫ト血壓トノ關係ニ示スガ如ク、十一名ノ肺結核患者ニ就キ行ヘル一日中六回乃至七回ノ血壓測定ヨリ其ノ時ノ室溫及氣溫トノ關係ヲ觀察セル實驗例ニ於テ、同時ニ一日中ノ血壓動搖ノ概要ヲモ探知セント試ミタリ。詳シキ表ハ第三報ニ記載セルモ、其ノ血壓動搖ハ矢張り晝間ハ高クシテ夜間ニ低下ヲ示セリ。而シテ午前十時頃ヨリ午後三時頃マデノ間一般ニ最高ナルモノ、如シ。午後七時ニハ既ニ下降シ、午前零時及午前四時或ハ五時ノ睡眠中ニハ殆ド全部低下ヲ示セリ。而シテ最低血壓ハ、前記ノ四例ニ於テモ又後者ノ例ニ於テモ共ニ一定ノ變化ヲ求ムルヲ得ズ。夜間

之ニ依リテ
 血壓動搖ヲ
 見ル時ハ、
 一般ニ起牀
 後血壓ハ漸
 次上昇シ、
 夜ニ入りテ
 降下ヲ示ス
 モノ、如シ
 然レドモ此
 ノ動搖ハ一
 定セルモノ
 ニ非ラズシ

ト雖モ低下ヲ示サズシテ可成リ高位ニ存スルモノ多シ、從テ脈壓ハ晝間大ニシテ夜間減少ヲ示スモノ一般ニ多數ナリ。午前、午後ノ相違ニ依ツテ血壓ニ大差ヲ來スモノナリヤ否ヤヲ知ラントシテ、一〇三名ノ患者ニ就キ、午前及午後ノ二回ニ嚴密ナル血壓測定ヲ施行セリ。而シテ午前中ノ測定ハ九時ヨリ十時ノ間、午後ハ三時前後ヲ適當ト認メテ選定シ、

同一患者ニ就テ試驗ヲ反復セリ。此ノ結果ヲ總括平均セルモノハ、第二表ノ示ス如クニシテ、其ノ成績ハ午後ニ於テ却テ僅カニ低減セルヲ認ム。然レドモ體溫ノ平均價ハ、午後ニ於テ〇・三度ノ上昇ヲ示セリ。詳シク見ルニ最高血壓ハ一・六耗、最低血壓ハ〇・一耗ノ低下ヲナシ、從テ脈壓ハ一・五耗ノ減少ヲ示セリ。然レドモ此ノ差異ヲ表ハス數字ハ實ニ僅少ナルモノニテ、血壓數値ノ見地ヨリ眺ムル時ハ、左程顧慮ヲ要スルガ如キ程度ノモノニ非ラザルナリ、故ニ血壓測定ハ、午前九時頃、又ハ午後三時頃ニ行フモ一般的ニハ大ナル差異ヲ常ニ示スモノニ非ズト見テ可ナリ。

第二節 日ニ依ル差異

血壓ハ一日中ニテ變化スル如ク、日ニ依リテモ變化アルモノナリ。余ハ肺結核患者ニテハ大約如何程ノ範圍ニテ之レガ動搖シツ、アルモノナルカヲ知ラントシテ、二十一名ノ患者ニ就キ實驗ヲ遂行セリ。即チ一週間ニ互リテ毎日連續シテ午前九時ヨリ同十時迄ノ同時刻ニ血壓測定ヲ反復實施セリ。此ノ中九例ハ毎回腰掛ノ位置ニテ、他ノ十二名ハ病牀ノ仰臥位ニテ測定ヲ行ヘリ。此ノ各例ノ數字ハ、第三表ノ示ス如クナルモ、全體ヲ平均スル時ハ腰掛ニ坐シタル者ニ在リテハ七日間ノ動搖ノ程度ハ左ノ如シ。

第二表 午前及午後ノ比較

測定時	最高血壓		最低血壓	脈壓	脈搏數	體溫
	觸診法	聽診法				
午前	104.0	107.5	63.1	44.4	81.0	36.7°
午後	103.0	105.9	63.0	42.9	84.0	37.0°
其ノ差	-1.0	-1.6	-0.1	-1.5	+3.0	+0.3

動搖ノ平均數

動搖ノ範圍

最高血壓
最低血壓
脈壓

一・〇耗 (六—一九)耗
一・〇耗 (六—二〇)耗
一・〇耗 (五—一八)耗

第三表(其ノ一)

姓名 年齢 病期	期日	最高 血圧	最低 血圧	脈壓	脈搏 數	體溫	室溫
粕谷 26歳 第二期 坐位	10/VII	85	54	31	108	36.5°	26.0°
	11/VII	86	58	28	90	36.9°	28.0°
	12/VII	81	58	23	96	36.8°	28.0°
	13/VII	81	60	21	96	36.3°	24.0°
	14/VII	81	61	20	102	36.6°	25.0°
	15/VII	81	58	23	84	36.6°	23.0°
最小—最大 及其ノ差		80— 86	54— 61	20— 31	84— 102	36.3°— 36.9°	23.0°— 28.0°
		6	7	11	18	0.6°	5.0°
野村 18歳 第三期 坐位	17/VIII	107	80	27	96	37.0°	26.0°
	18/VII	107	80	27	96	36.9°	25.0°
	19/VII	116	79	37	90	37.0°	28.0°
	20/VII	120	80	40	102	36.8°	29.5°
	21/VII	120	80	40	96	37.0°	24.5°
	22/VII	119	82	37	90	36.9°	27.5°
23/VII	115	74	41	84	36.7	27.5	
最小—最大 及其ノ差		107— 120	74— 82	27— 41	84— 102	36.7°— 37.0°	24.5°— 28.0°
		13	8	14	18	0.3°	5.0°
工藤 17歳 第三期 坐位	23/VII	121	80	41	102	37.7°	„
	„	119	79	40	108	37.1	„
	„	116	79	37	108	37.4	„
	„	123	79	44	108	37.8	„
	„	116	71	45	102	37.3	„
	„	116	78	38	102	37.4	„
„	112	69	43	102	37.3	„	
最小—最大 及其ノ差		112— 123	69— 80	37— 45	102— 108	37.1°— 37.8°	
		11	11	8	6	0.7	

次三十二名ノ仰臥位ニテ測定セルモノ、結果ノ平均ヲ求ムルニ

動搖ノ平均數

動搖ノ範圍

最高血壓

九・二耗

(三——一四)耗

最低血壓

八・八耗

(四——一三)耗

脈 壓

一〇・二耗

(六——一五)耗

而シテ以上ノ實驗例中、坐位ニテ測定セル者ハ、輕症者ニシテ、後者十二名ハ重症者ナリ。前者ハ運動ヲ許サレツ、アル者ニテ、後者ハ安靜ヲ命ゼラレツ、アル者ナリ。此ノ實驗ノ結果ヨリ見ルニ、日ノ相違ニ因ル血壓價ノ差違ハ相當ナルモノニシテ、又運動ヲ許サレツ、アル輕症者ハ、安靜ヲ守リツ、在ル重症者ヨリモ、此ノ動搖ノ範圍少シク大ナリ。而シテ此ノ日ニ因ル血壓ノ差ハ、各個人ニテ大差アリ。仰臥位ニテ測定セル者ニ於テ、七日間同時刻ノ測定ニテ僅カニ

數耗ノ動搖アリシニ過ギザルモノアリ。又坐位測定ノ者ニ於テ、此ノ間二〇耗ノ大ナル變動ヲ示セル者アリキ。最高血壓ノミナラズ又最低血壓及脈壓モ殆ド最高血壓ト同様ノ變動ヲ示シ、此ノ三者ノ平均數値ニハ大差ヲ認メズ、第二表ニ是等ガ成績ノ一部ヲ表示セリ。

第三表(其ノ二)

姓名 年齢 病期	期日	最高 血壓	最低 血壓	脈壓	脈搏 數	體溫	室溫
多田 29歳 第三期 仰臥位	17/VII	96	60	36	84	37.7°	26.0°
	18/VII	96	66	30	90	37.8°	25.0°
	19/VII	94	63	31	90	37.8°	28.0°
	20/VII	90	62	28	84	37.5°	29.5°
	21/VII	95	64	31	84	37.2°	24.5°
	22/VII	94	62	32	84	37.4°	27.5°
	23/VII	94	63	31	78	37.0°	27.5°
最小—最大 及其ノ差		90— 96	60— 66	28— 36	78— 90	37.0°— 37.8°	24.5°— 28.0°
..		6	6	8	12	0.8°	5.0°
宮田 25歳 第二期 仰臥位	..	134	87	47	84	37.2°	..
	..	132	92	40	78	37.0	..
	..	130	91	29	78	36.8°	..
	..	125	88	37	84	37.1°	..
	..	124	82	42	84	36.7°	..
	..	130	82	48	102	37.4°	..
	..	120	79	41	84	37.2°	..
最小—最大 及其ノ差		120— 134	79— 92	37— 48	78— 102	36.7°— 37.4°	..
..		14	13	11	24	0.8	..
勝目 27歳 第三期 仰臥位	..	107	80	27	102	36.5°	..
	..	106	75	31	90	36.1°	..
	..	106	74	32	90	35.7°	..
	..	104	78	26	102	36.5°	..
	..	104	75	29	84	35.5°	..
	..	98	72	26	90	35.5°	..
	..	102	80	22	90	36.0	..
最小—最大 及其ノ差		98— 107	72— 80	22— 32	84— 102	35.5°— 36.5°	..
..		9	8	10	18	1.0	..

第三節 季節ト血壓トノ關係

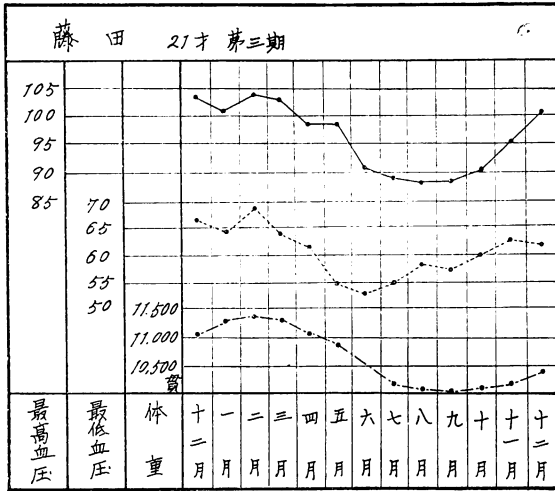
一般的ニ起ル末梢神經ノ減弱或ハ體重ノ減少等ヨリ見ル時ハ血壓ハ夏期ニ於テ降下スベキナリ 然レドモ患者ニアリテハ病勢ノ變化加ハルヲ以テ血壓ノ變化ハ更ニ複雑ナルモノトス。

余ハ肺結核患者ノ血壓ハ、四季ヲ通ジテ如何ニ動搖スルモノナルカヲ知ラント欲シ、大正十三年十二月初旬ヨリ、東京

市療養所ニ於テ大氣療法實施トシテ選出セラレタル患者比較的停止性病型多數ヲ占ムル二十七名ニ就キ每週一回宛、シカモ同時刻ニ血壓測定ヲ行ヒ、年餘ニ亙ル長期間ノ觀察ヨリシテ四季ニ於ケル動搖狀態ヲ見タリ。此ノ結果ニ就テハ、各測定ノ數値ヲ別々ニ列舉スルハ複雑ナルヲ以テ、一ヶ月毎ニ平均價ヲ求メ、之レヲ比較對照シテ季節的動搖ヲ見タリ。今各例ノ詳細ヲ省略シ左ニ其ノ一部ヲ表セン(第四表)。

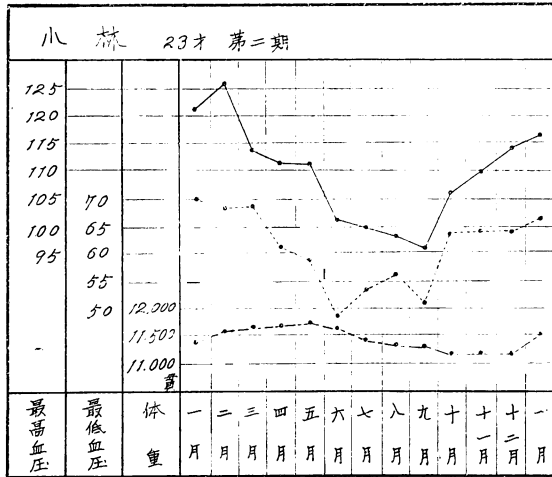
本検査ニ於ケル全例二十七名中三名ハ、最初ヨリ滲出型進行性ノ者ニシテ、後ニ至リ増悪シ、終ニ至レル者ナルガ、他ノ二十四名ハ不變或ハ良好ノ經過ヲ取レル者ニテ、表示セル四例ハ其ノ一部ナリ。死ノ轉歸ヲ取レル三名ノ血壓經過ハ豫後ノ章ニ記載セリ。

第四表(第一例)



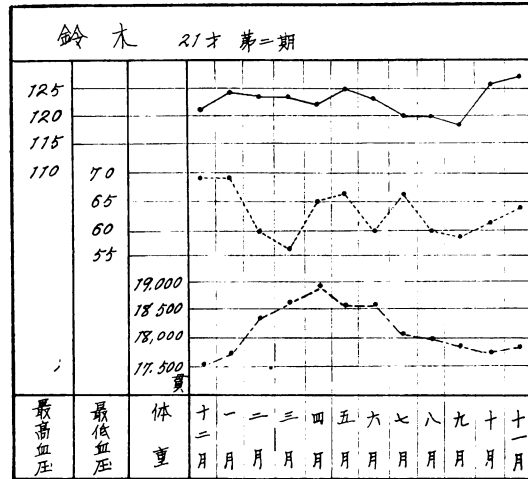
原著 鈴木 肺結核患者ノ血壓ニ就テ

第四表(第二例)

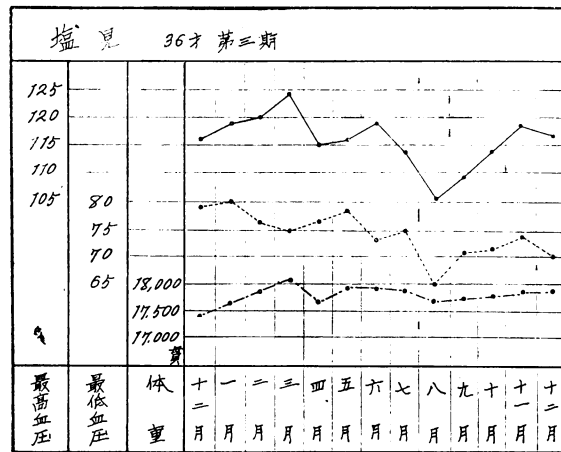


二十四名ノ觀察結果ヲ見ルニ肺結核患者ニテ、病型ノ停止性ナル者及ビ治癒的傾向ニ在ル者ハ、四季ヲ通シテノ血壓經過ハ、夏期ニ一般ニ低下ヲ示スモノ多數ナリ。四、五月ノ頃ヨリ漸次降下シ、七、八、九月ニ於テ最低ヲ示シ、爾後次第ニ増進シ舊位ニ至ルヲ見ル

第四表(第三例)



第四表(第四例)



六二二
 一般ニハ十二月ヨリ二月ノ頃ヲ最高位トスルモノ、如シ。然レドモ實驗例ノ全部ガ斯ク規則正シキ成績ヲ示セルニハ非ラズシテ、表ニ示スガ如ク、經過ノ良好ナル者ニテ夏期血壓價ノ動搖ハ餘リ大ナラザリシ者等アリテ、必ズシモ一定セズ。病型不變ノ者ニ於テモ同様なリ。

而シテ最高血壓及最低血壓各例別々ノ經過ヲ見ルニ、夏季血壓價降下ノ際、最高血壓ニ比シ最低血壓ノ降下ハ多少輕微ナルモノ、如シ。從ツテ是等ニテハ、脈壓ハ夏季多少減少ヲ示スモノトス。
 尙又表ニハ體重消長ノ状態ヲモ同様ニ記載セリ。肺結核患者ノ體重ハ、余ハ大正十年ヨリ十二年ニ互リ、二十九名ノ停止性ノ患者ニ就テ而モ途中一時的ニスラ病狀ノ著變ニ遭遇セザリシ者ニテ、毎週一回ノ測定ヲ行ヒタル其ノ平均結果ハ四月ニ於テ體重ハ最大ニシテ九月ニ最低ヲ示セリ。今余ガ本實驗ニ於テ體重ノ消長ヲ見ルニ、矢張り略々同様ノ成績ヲ示セリ。而シテ此ノ體重消長ノ經過ト最高血壓昇降ノ經過トヲ對照スルニ、兩者ハ必ズシモ嚴密ナル平行ヲ示サズ。體重ハ變化セルニ血壓ハ何等ノ昇降ナク經過セルアリ。或ハ平行シテ降下ヲ示セルモ、上昇ニ際シテ一致セザル等アリト斷定

シ難シ。然レドモ一般ニハ體重ノ經過ト血壓動搖ガ略ボ平行ヲ示スガ如キ者多數ニ存ス。尙又血壓昇降ハ體重ノ消長經過ヨリ少シク前驅スルガ如キ關係ヲモ認ムルコトヲ得、尙豫後的經過トノ關係ハ後章ニテ表示ト共ニ細述スル所アリ。

結論

- 一、肺結核患者ノ一日中ニ於ケル血壓昇降ハ、一般ニ晝間ハ高位ニシテ、夜間殊ニ睡眠中ハ低位ナリ。
- 二、逐日同時刻ノ血壓ノ日ニ因ル相違ハ大ナルモノニシテ、一週間内ニ於テ平均約一〇・〇耗水銀柱ノ差違アリ。而シテ安靜ヲ守ル者ノ血壓動搖ハ、運動スル者ニ比シ其差違少シク小ナリ。
- 三、比較的停止性ノ肺結核患者ノ、四季ヲ通ジテノ血壓動搖ハ、殆ンド不變ナル者モ存スレド、夏期ニ於テ、血壓多少低下シ冬期ニ於テ上昇ヲ示スモノ多シ。

第一章 文獻

- 1) 西山, 現役兵ニ於ケル血壓動搖ノ範圍ニ就テ. 軍醫學雜誌. 第157號. 大正15年7月. 2) 柴山, 日本人ノ血壓ニ就テ. 東北醫學雜誌. 第4卷. 第1冊. 3) 林, 眞野, 開氣患者ノ血壓ニ就テ. 臨牀醫學. 大正8年. 第7年度. 4) 川上, 肺結核患者ノ血壓ノ臨牀的觀察. 結核. 第3卷. 第2號. 大正14年3月. 5) 勝沼, 血壓ト睡眠トニ關シテ. 愛知醫學雜誌. 第32卷. 6號. 大正14年11月. 6) 高橋, 結核患者ノ血壓眞結核治療上ニ於ケル血壓ノ意義ニ就テ. 東京醫學會雜誌. 第37卷. 第2號. 大正12年2月. 7) 板澤, 血壓亢進ノ病理及其療法. 大正15年. 8) 佐々, 血壓及血壓亢進就高壓病. 大正15年. 9) 石川, 血壓ニ關スル研究. 第一. 中外醫事新報. 1082, 1083號. 10) Schnitzer, Klinische Beobachtungen über das Verhalten des Blutdrucks während der Lungentuberkulose. Beiträge z. Klin. d. Tuberk. Bd. 23. H. 2. 1912. 11) John, A Clinical Study of the Effects of Sleep and Rest on Bloodpressure. Archives of internal Medicine. 1912. 12) H. Daily, High Blood Pressure.

第二章 既往症及合併症ト血壓ノ關係

第一節 既往症ト血壓ノ關係

本章以外ニ於テハ特ニ記載ナキ限り肺結核ノミノ患者ニ就テ述べ、直接血壓ニ關係ヲ有スル他ノ疾患ハ既往症ニ於テスラ之ヲ有セザル患者ノミニ就キテ論ゼリ。今余ハ本章ニ於テ他ノ合併症ヲ有スル者、或ハ血壓ニ關係スル既往症陽性ナ

ル者ノ血壓ニ就キ述ベントス。然レドモ是等ノ項ニ至リテハ斷言ヲ避ケ、唯今日迄ニ得タル成績トシテ之レヲ略述セントス。

心臟疾患及ビ腎臟炎並ニ脚氣ノ既往症ヲ有スル者二七五名ニ就キ検査セル成績ハ表示ノ如シ。表中十ノ記號ハ其ノ疾患

(第五表) 既往症トノ關係

性別	既往症			最高血壓	最低血壓	脈壓	脈搏數	體溫	體重	患者數	年平均數	所屬患者類		
	心臟病	腎臟炎	脚氣									I	II	III
男性患者	-	+	-	113	69	44	94	37.1°	12.320	23	29	4.1	43.9	51.7
	-	-	+	108	65	43	92	37.1°	11.820	135	29	14.1	41.5	44.4
	+	-	+	115	68	47	92	37.2°	12.250	24	28	20.8	33.3	45.9
	-	+	+	116	70	46	93	37.3°	13.010	15	33	13.3	66.7	20.0
	+	+	-	113	70	43	102	37.1°	12.540	5	32	0	20.0	80.0
	+	+	+	105	70	35	100	37.0°	11.170	4	35	0	50.0	50.0
										225				
女性患者	-	+	-	109	69	40	94	37.0°	10.270	11	29	27.3	10.0	12.7
	-	-	+	100	63	37	99	37.4°	10.500	35	28	13.9	31.0	55.0
	+	-	+	105	66	39	98	37.3°	10.920	13	26	15.4	23.1	61.5
	-	+	+	111	70	39	103	37.1°	10.910	4	26	50.0	0	50.0
	+	+	-	105	76	29	108	37.5°		2	25	0	50.0	50.0
	+	+	+	110	79	31	15	37.5°	11.120	3	21	0	33.3	66.7
										84				

ノ既往症ノ陽性ナル事ヲ示スモノナリ。心臟病ノミノ既往症ノ陽性ナル者、患者ノ言ノミニ從ヘバ相當多數ニ存セシモ果シテ之レノミガ獨立ニ存セシヤ否ヤ疑問ナキ能ハザルヲ以テ、是等ハ此所ニモ除外セリ(第五表)。

上掲ノ患者ヲ更ニ其ノ平均年齢及病期ニ依テ分チ血壓價ヲ調査スルニ腎臟炎ノ既往症ヲ有スルモノノ最高血壓ノ平均價ハ第一報第二章ニ述ベタル標準價ヨリ多少高位ニ在ルモノト云フヲ得。脚氣ノ既往症ヲ有スル者ノ平均價ハ差違ヲ認メシメズ。其他既往症ニ於テ腎臟炎、脚氣及ビ心臟疾患ノ同時ニ存セシ者ハ例數少キモ、本表ニテハ大ナル差違ハ現ハシ居ラズ。

然レドモ是等諸疾患ノ既往症有ルモノモ其ノ血壓ハ主トシテ現在ノ肺結核ノ病狀ノ輕重ヨリ支配セラル、モノ大多數ナルヲ以テ、是等ノ平均價ニ就テ論ズルヨリモ、寧ロ個々ノ患者ニ就テ精細ニ觀

察セザルベカラズ。此ノ關係ハ更ニ次ノ合併症ノ項ニ於テ述ベシ。

第二節 合併症ト血壓ノ關係

肺結核患者ニ於テ、血壓ニ直接關與スル他ノ疾患ノ合併ヲ發スル場合ニハ其ノ血壓ハ非常ニ複雑トナルモノニシテ、合併症ノ程度及ビ肺結核其ノモノ、狀態ニヨリテ昇降一様ニ非ラズ。即チ結核ノ輕微ナル場合ニハ健康人ニ近似ノ成績ヲ示シ、主トシテ合併症ノ程度ヨリ支配セラルレドモ、結核ノ重症トナルニ從ヒテハ寧ロ結核ノ程度ニ比例シテ血壓ハ下降ヲ來ス。而シテ其ノ間ニ尙合併症ノ狀態モ關聯スルヲ以テ、到底合併症無キ者ノ如ク簡單ニ論定スル事能ハザルナリ然レドモ合併症ニ就キテモ同一疾病ノモノ多數例ヲ蒐集シ、種々ナル方法ニ分類スル時ハ其ノ平均價ヨリ大勢ヲ推論スル事ヲ得。余ハ未ダ各合併症ニ就テ多クノ例症ヲ有セザルヲ以テ、此所ニ是等ノ關係ヲ闡明スルヲ得ザレドモ、今左ニ文獻ト共ニ余ノ得タル概括ノミヲ述ベシ。

A、心臟疾患。

心臟疾患ニテハ血壓ハ上昇スルモノアリ、或ハ然ラザルモノアリ。大動脈閉鎖不全ニ於テハ主トシテ最高血壓ハ著シク高位ヲ示シ、最低血壓ハ然ラズ。從テ脈壓ハ大トナルモノナリ。然レドモ肺結核ノ加ハリ來ルトキハ大イニ其ノ影響ヲ受ケ、低下ヲ示シ來ルモノトス。

B、腎臟炎

血壓ノ亢進ヲ來スモノアリ、然ラザルモノアリ。急性ノモノニテハ大多數上昇ヲ示スモノナリ。然レドモ余等ノ療養所ニアル患者例ニテハ急性腎臟炎ノ合併症ヲ見ル例ハ少クシテ大多數ハ慢性腎臟炎ヲ合併スルモノナリ。而シテ之ヲ有スルモノハ肺結核ノミノ患者ヨリ血壓ハ多少高位ナルモノ多シ。更ニ此所ニ附記スベキハ腎臟結核患者ノ血壓ニシテ本療養所ニ於テ折笠學士ノ嚴密ナル検査ニ依リ腎臟結核ノ存在ノ確認セラレタル者、余ノ血壓測定例中ニ數例有ルヲ以テ之レニ就キ報告セン。即チ腎臟結核ノ例ニテハ血壓ハ年齡ニ比例セズ寧ロ主トシテ肺結核ノ病狀ニヨリテ高位ヲ示スモノノ如シ。重症ナル第四例(田沼氏)ノ如キハ四十五歳ニシテ最高血壓七四耗、最低血壓五〇耗ノ如キ低壓ヲ示セリ。

(第六表) 腎臟結核患者ノ血壓

姓名	年齢	病期	最 高 血 壓 診 法	最 低 血 壓 診 法	最 高 血 壓 診 法	最 低 血 壓 診 法	脈 壓	脈 搏 數
楫下	20	II	110	70	115	45	84	
森村	29	III	85	40	88	48	74	
守屋	26	II	132	70	132	52	90	
田沼	45	III	72	50	74	24	84	
林	27	II	110	85	114	29	106	
塚本	24	I	124	82	128	46	86	
青木	46	III	103	71	105	34	96	

原著

鈴木 肺結核患者ノ血壓ニ就テ

C、動脈硬化症。

肺結核患者ニテモ動脈硬化症ヲ合併スル場合ハ一般ニ血壓ハ亢進ス、シカレドモ肺結核ノ増悪ニ從ヒテ血壓降下ヲ示スモノトス。

D、脚氣

重症ノ肺結核患者ト雖モ、脚氣ノ併發スル時ハ血壓ニ異常ノ亢進ヲ示ス者アリ、又全ク變化ナキ場合モ存セリ。又最低血壓ノ低下ハ多クノ例ニ多少見ラル、所ナリトス。

E、結核性腦膜炎

文獻ニハ之レノ併發シ來ル時ハ血壓ハ常價ナルカ、或ハ僅カニ高クナルモノナリト稱スレドモ、余ハ此ノ合併症ノ起ル以前ヨリ時々血壓測定ヲ行ヒタル者ニテ、偶々腦膜炎ヲ起シ來レル例ニ見テ少數例ナガラ多少ニ拘ラズ血壓ハ皆上昇ヲ示セルヲ認メタリ。其ノ内ニハ三ノ耗ノ高キ上昇ヲナセルアリ。而シテ此ノ際腰椎穿刺ハ血壓ヲモ又多少降下セシムルモノ、如シ。

F、神經衰弱症

之レノ血壓ハ動搖性ニ富ミ、時ニヨリ非常ニ高低差違ヲ示スモノナリ。

結 論

肺結核患者ニテ心臟及ビ腎臟疾患ヲ合併スル者ノ血壓ハ、其ノ主客兩者ノ程度ニヨリテ一樣ナラズ。然レドモ肺結核ノ重症トナルニ從ヒテ一般ニ低下ヲ示スモノナリ。其他血壓ニ關與スル疾患ノ誘發セラレタル時、血壓ハ每常一定ノ結果ヲ示サズ、常ニ主トシテ肺結核其ノモノ、輕重ニ支配セラル、モノトス。

第二章 文獻

- 1) 林, 廣野, 脚氣患者ノ血壓ニ就キテ. 臨牀醫學. 第7年度. 大正8年. 2) 高龜, 結核患者ノ血壓及結核治療上ニ於ケル血壓ノ意義ニ就テ. 東京醫學會雜誌. 第37卷. 第2號. 大正12年2月. 3) 高龜, 結核患者ノ血壓ニ關スル知識増補. 結核. 第1卷. 第2號. 大正12年5月. 4) 足立, 兵本ノ體溫. 脈搏及ニ血壓ノ統計的觀察. 軍醫國雜誌. 137號. 大正13年7月. 5) 岩橋, 胸膜炎ノ血液像. 軍醫國雜誌. 144號. 大正14年6月.
- 6) 柴山, 日本人ノ血壓ニ就テ. 東北醫學雜誌. 第4卷. 第6冊. 7) 板澤, 血壓亢進ノ病理及其療法. 大正15年. 8) 吳, 心臟診斷及治療學. 大正11年. 9) 佐々, 血壓及血壓亢進並ニ高血壓. 大正15年. 10) M. Rosenberg und F. Munter. Zur Frage der renalen oder extrarenalen Blutdrucksteigerung. Deutsch. med. Wochenschr. No. 42. 1924. 11) Schrijfer, Über den Blutdruck bei Lungentuberkulose. Zentralbl. f. d. g. T. B.

forsch. 1925. 12) **Schnitzer**, Klinische Beobachtungen über das Verhalten der Blutdruck während der Tuberkulose. Beiträge z. Klin. d. Tuberk. Bd. 28, 1912. 13) **R. Uitzmann**, Blutdruckmessungen bei chirurgische Nierenkrankungen. insbesondere bei Nierentuberkulose. Münch. med. Wochenschr. Nr. 18, 1914. 14) **H. Gran-Ronsdorf**, Die Beziehungen Zwischen der Lungentuberkulose und Erkrankungen des Herzens und der Gefäße. Internat. Centrall. f. d. g. T. B.-forsch. 1911. 15) **Levy-Down, Max und Weinstein**, Zum Verhalten des Blutdrucks nach Röntgenbestrahlung. Centrall. f. d. g. T. B.-forsch. 1922. 16) **Franco**, La Tension arteriale nella tubercolosi polmonare. Centrall. f. d. g. T. B.-forsch. 1925. 17) **Brauer, Schröder und Binnemfeld**, Handbuch der Tuberkulose. Bd. III, 1923. 18) **Powell and Hartley**, Diseases of the Lungs and Pleura. 1921. 19) **A. Hoffmann**, Lehrbuch der funktionellen Diagnostik und Therapie der Erkrankungen des Herzens und des Gefäßes. 1920. 20) **E. Loewenstein**, Handbuch der gesamten Tuberkulose-therapie. Bd. I, II, 1923. 21) **Macnamara**, Blutdruck bei Nephrosen. Deutsch. med. Wochenschr. 1908. 23) **Bitort**, Untersuchungen über die Ursache der nephritische Blutdrucksteigerung. Deutsch. med. Wochenschr. 1911. 23) **F. Kühle**, Über Hypertonie. Deutsch. med. Wochenschr. Nr. 22, 1922. 24) **Mochwitz und Rosenberger**, Klinische und funktionelle Studien über Nephritis. Münch. med. Wochenschr. Nr. 26, 1916. 25) **Parl**, Über Herzhypertrophie und Hypertonie. Medizinische Klinik. Nr. 27, 1919. 26) **L. Krehl**, Pathologische Physiologie. 1920.

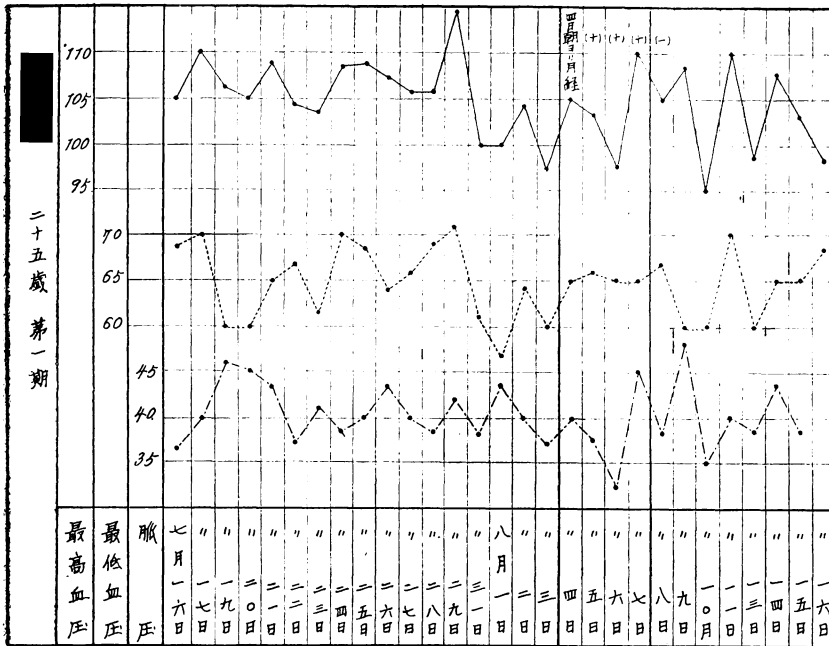
第三章 月經ト血壓ノ關係

月經ト血壓トノ關係ニ就テ一般健康人ニ於テハ月經ノ開始前ニ於テ血壓ハ上昇シ、而シテ開始ト共ニ低下シテ月經ノ終熄後數日ニシテ常價ニ復スルモノナリト稱セラル。

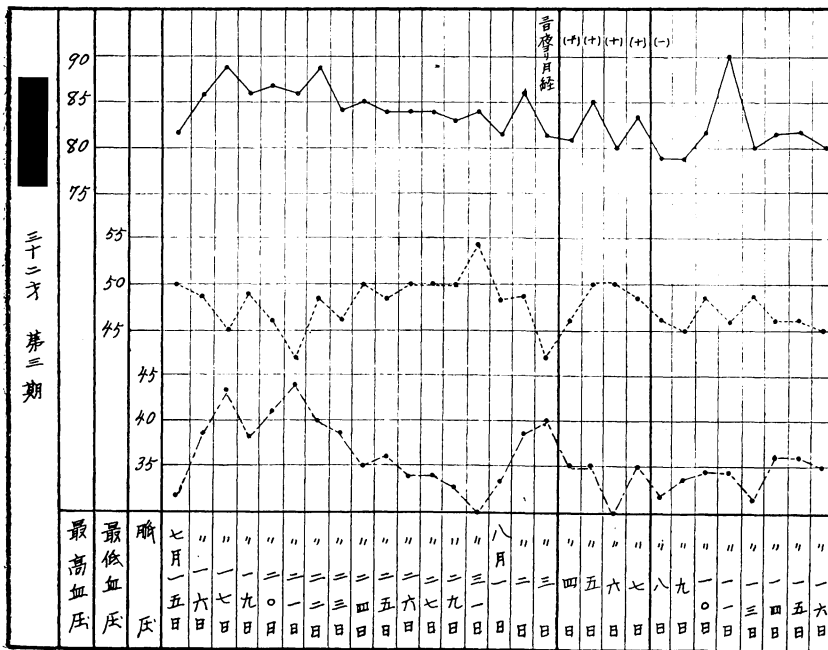
余ハ肺結核患者ニテ月經ト血壓トノ關係ガ如何ニ存スルヤヲ精査セント試ミタリ。元來肺結核患者ニ於テハ無月經症ノ者多ク、殊ニ月經ノ毎常正規的ニ來ルガ如キ者ハ重症者ニ於テハ甚ダ尠シ。余ハ試驗ニ際シテ成ル可ク重症者ニテ、シカモ月經ノ比較的正规的ニ來潮スルガ如キ者八名ヲ選ビテ毎日同時刻ニ一回宛、一ヶ月ニ互リテ逐日の血壓測定ヲナシ此ノ血壓動搖經過ヨリシテ月經トノ昇降關係ヲ見タリ。而シテ八名中不幸ニシテ三名ハ此ノ測定期間中ニ月經ノ來潮ヲ見ザリキ。然レドモ反ツテ又從來規則正シク月經ノ存セシモノガ來潮スベキ時期ニ於テ之レヲ缺グ場合、血壓ガ如何ナル狀態ニアルカヲ見ル目的ニ之レヲ應用スル時ハ、更ニ精細ナル觀察ヲナシ得タル事トナルモノトス。

從來報告セラル、月經ト血壓トノ關係調査ニハ、多クハ月經時ヲ中心ニ數回ノ血壓測定ヲ行ヒテ其ノ結論ヲ報告スル者

第七表 (第一例)

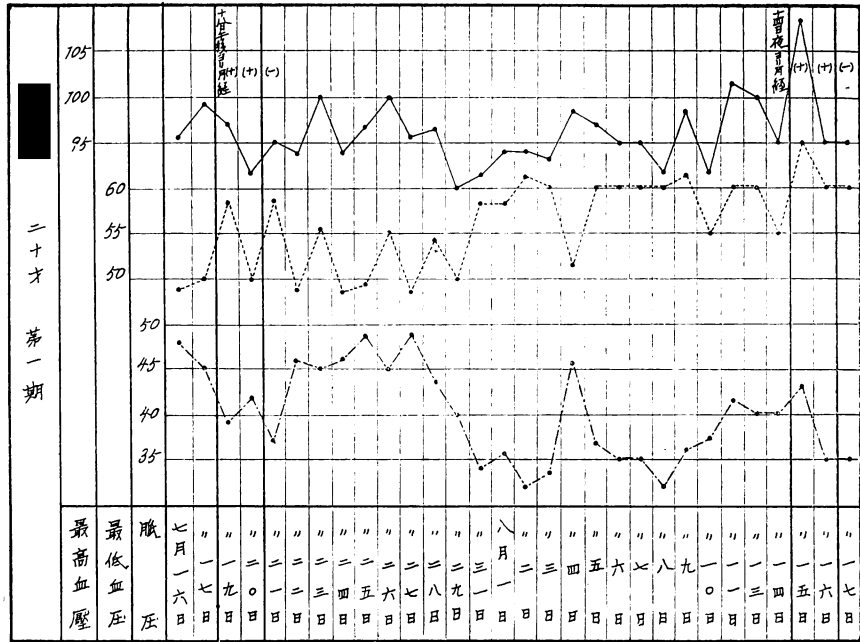


第七表 (第三例)

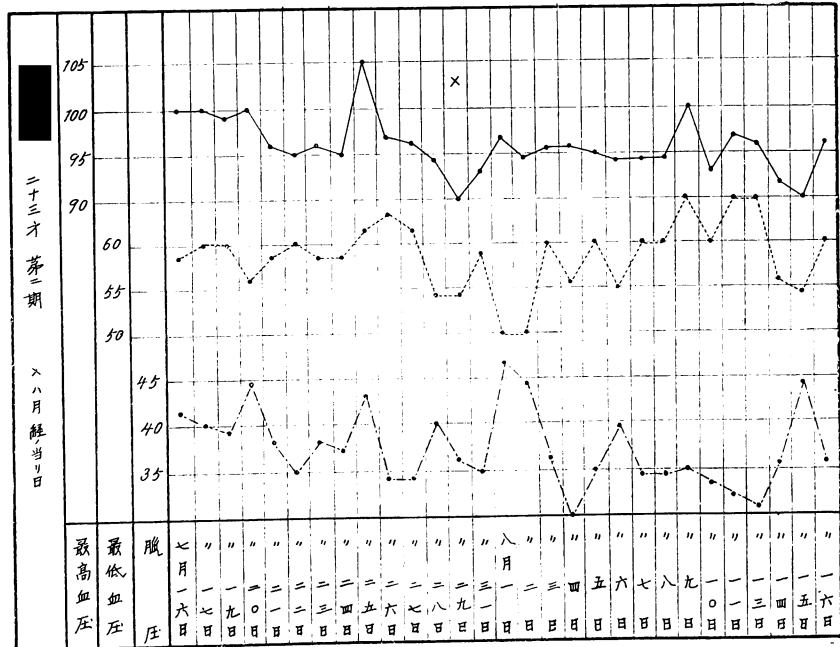


多シ。殊ニ月經直前ノ測定成績ニ就キ述ブル、モノ有レドモ、血壓測定ヲ定期的ニ毎回恰度月經ノ直前ニ行ハントスルガ如キハ殆ンド期シ得ザル所ナルヲ以テ、前記ノ如ク余ハ逐日的ニ測定セル血壓價ヨリシテ月經ト血壓ノ關係有無ヲ見

第七表 (第五表)



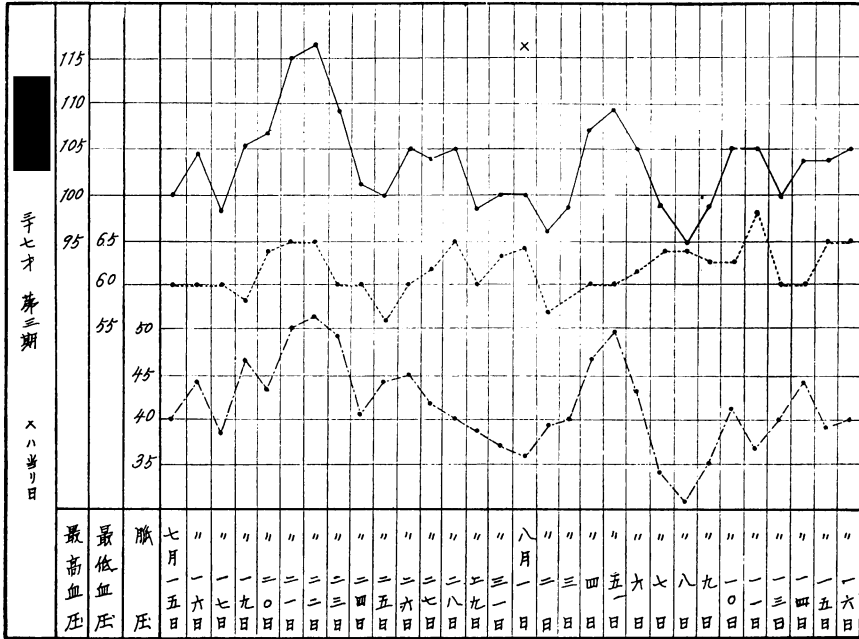
第七表 (第七例)



ト企テタリ。表示ノ血壓測定ハ、毎回午前九時ヨリ十時ノ間ニ施行セリ(第七表ハ其ノ一部)。

原著 鈴木 肺結核患者ノ血壓ニ就テ

第七表 (第八例)



原著 鈴木 肺結核患者ノ血圧ニ就テ

而シテ月經來潮前ニ於ケル血圧ニ就テハ未ダ少數例ノ成績ナルヲ以テ、斷言スルヲ得ザレドモ、此ノ結果ニ依ツテ見ル時ハ、月經前數日間ニ於テ血圧ノ漸次上昇シ來ルガ如キ現象ハ肺結核患者ニテハ每常認ムル能ハザリキ。此ノ試験例中ニハ、月經前或ハ來潮ノ初期ニ於テ多少最高血圧ノ高位ニ在ルガ如キモノ存スレドモ、表ニ示ス如キ逐日ノ血圧動搖ヲ顧ル時ハ、時トシテ存スル輕度ノ上昇ヲ以テ直チニ月經ノタメニ來レルモノトハ推定スルヲ得ズ尙又月經中及月經後或ハ月經ノ有無ニ於テモ最高血圧ニ就テ特記スベキ所見ヲ得ル能ハザルナリ。其他最低血圧及脈壓ニ就テモ明カナル變化ヲ認定スルヲ得ズ。

結論

肺結核患者ニ於テ血圧ハ月經ニ因リテ必ズシモ常ニ明カナル一定ノ變化ヲ示スモノニ非ズ、又月經期ニ於ケル月經ノ有無ニ依テモ血圧動搖ニ特殊ナル差違ヲ來スヲ見ズ。

1) 高血圧, 結核患者ノ血圧位ニ結核治療上ニ於ケル血圧ノ意義ニ就テ. 東京醫學會雜誌. 大正12年2月. 第37卷. 第2號. 2) 林, 眞野, 脚氣患

第三章 文獻

手七才 第三期 スハヨリ日

者ノ血壓ニ就テ、臨床醫學、第7年度、大正8年。3) 橋澤、血壓亢進ノ病理及其療法、大正15年。4) 石川、血壓ニ關スル研究(第四)、中外醫學新報、1095號。5) Rother, Blutdruck im Klimakterium. Brit. med. Journal. 2. Dec. 1910. 6) St. Somogyi, Menstruation und Tuberkulose. Beitrage z. Klin. J-Tuberk. Bd. 59, 1924.

第四章 豫後ト血壓ノ關係

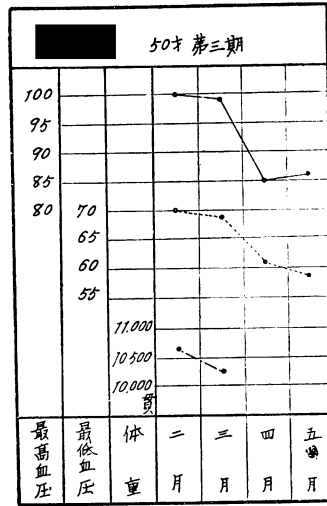
肺結核患者ニテ血壓測定ノ價值ハ診斷的ヨリモ寧ろ豫後的ニ大ナルモノナリト稱シテ重要視セラル、所ナリ。從ツテ之ガ文獻ハ甚ダ多數ナリ。然レドモ是等報告者ノ中ニハ肺結核患者ニ於ケル血壓測定ハ診斷上ト同様ニ豫後的ニモ何等價値ナシトスル Ladendorff 等ノ如キモノ無キニ非ズ。又 Losjick 及 Grant 等ノ如キハ一回ノ測定ニテハ餘リ價値ナキモ連續シテ屢々測定スル時ハ豫後判定上ニ大ナル意義ヲ有スルモノナリト稱ス。其他一般ノ文獻ハ病型ノ増惡進行ニハ血壓降下ヲ示シ、停止性或ハ治癒傾向性ヲ有スルニ至リテ血壓ハ上昇或ハ通常價ニ接近ヲ示スモノナリト稱シテ豫後的ニ大ナル價値ヲ認ム、而シテ又血壓下降ハ病竈ノ大サヨリモ多クハ病型ノ活動性ナルヤ或ハ非活動性ナルヤニ起因スルモノナリト稱セラル。

余モ亦豫後的ニ如何ナル關係ノ存スルモノナリヤヲ檢スル目的ヲ以テ相當期間連續シテ血壓測定ヲ行ヒタレドモ前記第一章ニ於テ述ベタル如ク、停止性ノ病型ノ者ニ於テモ夏期ニハ可成リノ血壓降下ヲ示スモノアルヲ以テ、單ナル數ヶ月ノ連續測定ニテハ此ノ下降期ヲ以テ病勢増惡ト見做スガ如キ誤リヲ生ズル恐アリ。更ニ又動搖性ニ富ム血壓價ニ在リテハ長時間ノ觀察ノ外頻回ノ測定成績ニ依ルニ非ラザレバ豫後的價値ノ判定上完全トハ言ヒ難キコト固ヨリナリトス。故ニ余ハ第一章ニ於テ述ベタル所ノ每週血壓測定ヲ行ヒテ年餘ニ及ビタル例ニ就キ豫後的經過ヲ引用シテ此所ニ説明セントス。

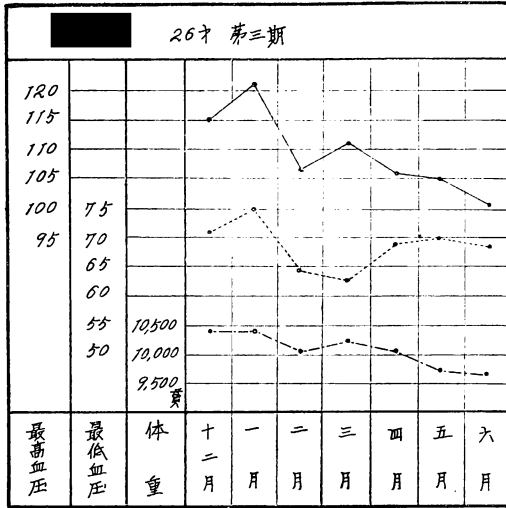
豫後不良ナルモノ。

余ガ長期間ノ血壓測定ヲ企テタル者ノ内ニテ漸時増惡シ、終ニ不幸死ニ至レルモノ三名アリ。左ニ表示スル所之レナリ(第八表)。

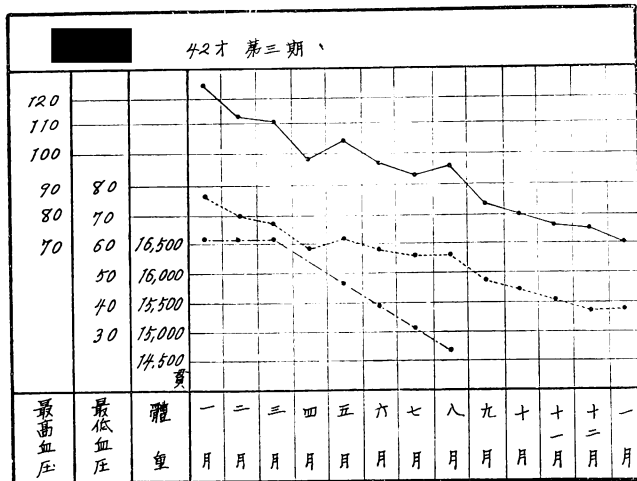
第八表(第一例)



第八表(第二例)



第八表(第三例)

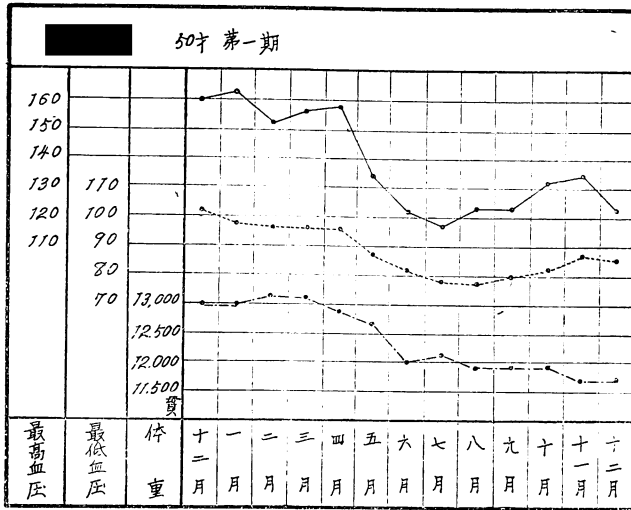


ハ病勢ノ増悪ニ從ヒテ低下シ死ニ至ル迄順次降下ヲ示スモノナリト云フ事ヲ得。尙又此ノ死ニ至レル者ニテハ、體重曲

呈シタレドモ他ニハ何等ノ合併症ヲ認メザリキ。結核ノ經過中ニモ心臟疾患、腎臟炎、脚氣、腦膜炎等ノ起リ來ル時ハ其ガ血壓ニ影響スルコトハ當然ナリ。又突然ノ急變ヨリ死ニ至ルガ如キ場合ニハ必ズシモ低位ヲ示シ居ラザルベキハ明カナリ。然レドモ上記ノ例ノ如ク、肺結核及腸結核ニテ漸次衰弱シテ死ニ至レル者ニ在リテハ血壓

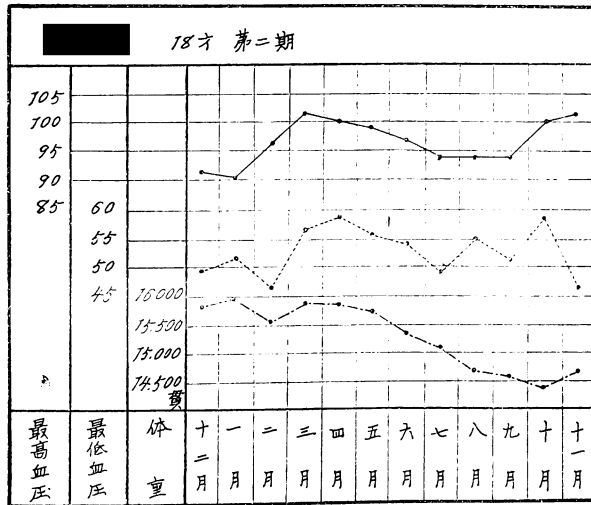
第二例ノ如キハ時ニ多少ノ不規則ヲ示スモ大體ニ於テ漸次血壓ハ下降ヲ示シ、第三例ノ如キハ最高血壓七〇。〇耗ノ低位ニ至ルマデ降下セリ。此ノ例ハ十三ヶ月ノ長キニ互リテ實ニ規則正シキ低減ヲ示セリ。尙又第二及第三例ハ中途ヨリ腸結核ノ症狀ヲ

第九表 (第四例)



原著 鈴木II肺結核患者ノ血壓ニ就テ

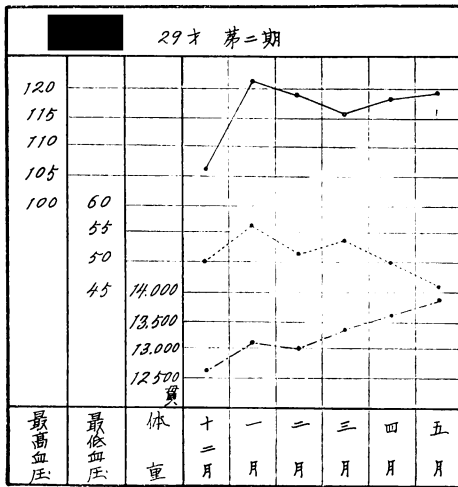
第九表 (第六例)



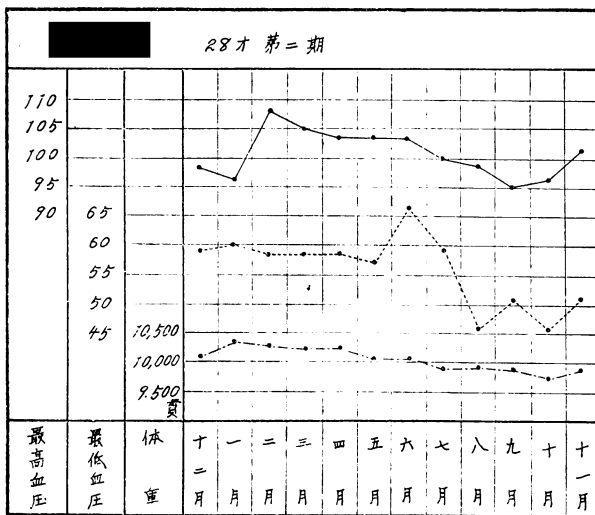
六三三

線ハ血壓曲線ト一致竝行シテ降下ヲ示セリ。
 經過不變ナルモノ。
 此ノ種ノ患者ニ在リテハ第九表ノ第四、六例ノ表ハス所ノ如ク夏期下降ヲ示スモノアリ、或ハ之レスラ存セザル者アリ
 而シテ全觀察期間ヲ通覽スルニ血壓變化ハ多少降下ヲ示シ、前年度ノ同期節ヨリモ低下セザルガ如キ状態ノモノアリ。
 又反對ニ多少上昇セル者モ存セリ何方ニ於テモ著變ハ認ムル能ハズ。尙此ノ種ノ例ニ於テハ體重ノ増減經過ハ血壓ノ動
 搖經過ト必ズシモ竝行ヲ示サズ。

第十表(第八例)

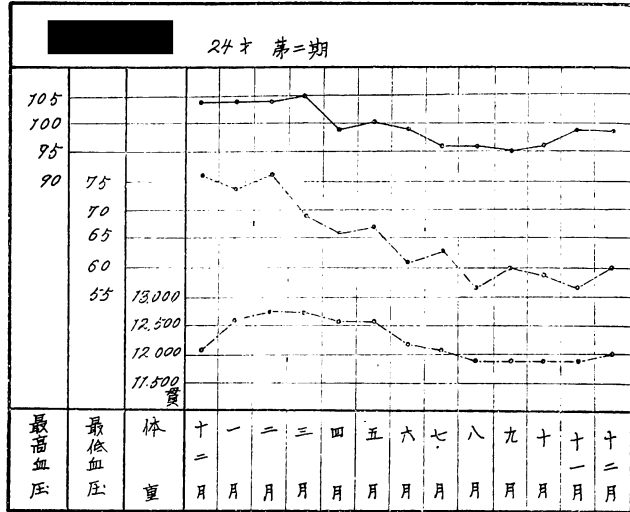


第十表(第九例)



經過良好ナル患者。
 此ノ種ノ例ニ於テモ夏期下降ヲ示シテ後再ビ舊位置ニ復歸スルモノアリ。又ハ殆ド變化ナク經過スルモノアリ。尙又一
 般状態ノ良好トナレルニ拘ハラズ前年度ノ同期節ヨリ多少ノ低下ヲ示スモノモ存スレド、大體ニ於テハ多少ノ昇降ノ後
 或ハ順當ニ幾分ノ上昇ヲ示セルモノ多シ、第十表ノ第八例ヨリ第十例迄ノ三例ガ之レナリ。
 是等ノ諸例ニ於テモ血壓ノ昇降ト體重ノ消長トノ關係ハ必ずシモ一致セザルモ著シキ血壓上昇ニ際シテハ體重ハ之ニ隨
 伴シテ大ナル増加ヲ示スヲ見ル。
 次ニ余ハ、余ガ血壓ヲ測定セル患者ニテ漸次病狀増悪シ終ニ死ニ至レル者、換言スレバ急變死ニ非ラザル者五四七名ニ

第十表 (第十例)



(第十一表) 死亡トノ關係

性別	時期分類	最高血壓	最低血壓	脈壓	患者數	平均年齡	所屬患者病期分類%		
							I	II	III
男性患者	一月以內	94	53	36	96	29	0	10.4	89.6
	二月一三月	100	60	40	166	29	1.3	19.3	77.4
	四月一六月	105	65	40	69	26	1.4	42.0	56.6
	七月一十二月	108	68	40	56	29	3.6	41.1	55.3
	一年以上	106	67	39	33	30	9.6	21.2	69.2
					410				
女性患者	一月以內	97	60	37	49	27	0	8.2	91.8
	二月一三月	94	60	34	58	26	0	15.5	84.5
	四月一六月	100	67	33	20	30	5.0	15.0	80.0
	七月一十二月	96	68	28	10	30	20.0	30.0	50.0
					137				

就テ第十一表ニ示スガ如ク測定日ヨリ死ニ至ル迄ノ期間ノ長短ニ從テ分類ヲ試ミ、豫後上ノ關係ヲ考察シタリ。一ヶ月以內トハ測定日ヨリ一ヶ月以內ニ死亡セル者ノ血壓ノ平均數ナリ。二ヶ月乃至三ヶ月トハ測定後二ヶ月乃至三ヶ月内ニテ死ニ至レル者ノ平均血壓價ヲ示セルモノナリ。以下表示ノ如シ。病期分類ハ血壓測定當時ノ病期ニ從ヘリ。以上ノ結果ヲ見ルニ未ダ必ズシモ多數例ニ非ラザルヲ以テ完全タルニ非ラザルモ、血壓價ハ一般ニ豫後不良ノ状態ニ在ル、死ニ近キ者程低下セルモノト云フベシ。故ニ血壓測定ハ豫後のニ大ナル價値ヲ有スルモ、而モ非常ニ徐々ニ増悪スル者アリ、或ハ比較的輕症者ニテ急劇ニ増悪死亡スル者アル故、全部ニ於テ必ズ是ヲ以テ豫後ヲ斷定シ得ルモノトハ言

ヒ難シ、サレバ血壓ノ漸次下降スルハ不良ノ徴ニシテ、血壓價ノ不變ナルカ、或ハ上昇ヲ示スモノハ病勢ノ停止性ニ在ルカ、或ハ治療傾向性ニ向ヘルカラ大體ニ於テ推定セシムルモノト見ル可キナリ。

結論

- 一、肺結核ニテ病狀漸次増悪シテ死ニ至ル者ニ於テハ血壓ハ病狀ノ増悪ト共ニ漸次下降ス。
- 二、停止性肺結核ノ經過中ニ於ケル血壓ハ殆ド不變ニテ動搖ナキカ或ハ僅少ノ昇降ヲ示スニ過ギズ。但シ夏期一時的ニ多少ノ下降ヲ示スモノアリ。
- 三、治療傾向性肺結核ノ經過中ニ於ケル血壓ノ動搖ハ多少ノ上昇ヲ示スカ、或ハ殆ド變化ナキモノ多シ。サレド又夏期一時的ノ降下ヲ示スモノ存セリ。
- 四、慢性肺結核ニテハ豫後ノ不良迫レル者程血壓ハ低位ニ在リ。

第四節 文獻

- 1) 永井, 肺結核患者ノ血液像ニ就テ. 日新醫學, 第11年, 第7號.
- 2) 柴山, 日本人ノ血壓ニ就テ. 東北醫學雜誌, 第4卷, 第1冊, 2) 川上, 肺結核患者ノ臨牀的觀察. 結核, 第3卷, 第2號. 大正14年3月.
- 4) 高橋, 結核患者ノ血壓故ニ結核治療上ニ於ケル血壓ノ意義ニ就テ. 東京醫學雜誌, 第37卷, 第2號. 大正12年2月.
- 5) 榎澤, 血壓亢進ノ病理及其療法. 大正15年.
- 6) Fischerberg, Pulmonary Tuberculosis. 1917.
- 7) Brugsch, Allgemeine Prognostik. 1918.
- 8) Ernst Iacowenstein, Handbuch, der gesamte Tuberkulose-therapie. 1928, Bd. II.
- 9) Powell and Harley, Diseases of the Lungs and Pleura. 1921.
- 10) Pottenger, Clinical Tuberculosis. 1917.
- 11) Handtler-Koepke, Die Klinik der Tuberkulose. 1921.
- 12) Brauer, Schröder und Himmelfeld, Handbuch, der Tuberkulose. 1923, Bd. III.
- 13) J. Ehringer, Zur Frage der Verhaltens des Herzens bei Lungentuberkulose. Beitrage z. Klin. d. Tuberk. Bd. 18, 1911.
- 14) Colbert, Le pronostic dans la Tuberkulose. Zentrall. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1922.
- 15) Belchov, et P. Farburg, La tension artirielle dans la tuberkulose Pulmonaire. Sa valeur diagnostique et prognostique Comparee à d'autres elements Cliniques. Zentrall. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1922.
- 16) Grant, Bloodpressure in pulmonary Tuberculosis. Tubercle. Bd. 2, No. 8, 1921.
- 17) Grigg, The diagnosis of pulmonary tuberculosis from the stand points of the industrial Physician. American Review of tuberculosis. Bd. 6, No. 4, 1922.
- 18) K. Kraus, Beziehungen der Lungentuberkulose Zu funktionellen Störungen der Herzfähigkeit, vornehmlich bei Solitären. Wiener med. Wochensh. No. 15, 1908.
- 19) T. Kewald und A. Selig, Über Herz-und Blutbefunde bei Lungentuberkulose. Internat. Centrall. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1908.
- 20) N. T. Strandgaard, Om Blodtrykket ved Lungens Tuberkulose Internat. Centrall. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1908.
- 21) H. Gran-Ronsdorf, Die Wechselbeziehungen zwischen der Lungentuberkulose und Erkrankungen der Herzens und der Gefässe. Internat. Centrall. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1911.
- 22) Taddendorf, Über Änderungen des Blutdrucks bei Lungentuberkulose. Zeitschrift f. Balmologie. No. 6, V, 1912.
- 23) I. S. Peters und E. S. Bullock, Bloodpressure Studies in tuberculosis at

a high altitude. Report of 60 Cases. Archives of Journal Medicine. Oct. 1913. 24) **Lewis Shuter**, Bloodpressure in pulmonary tuberculose. Internat. Centraltbl. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1914. 25) **O. Trivino**, Verminderte Blutdruck und Tachykardie bei der Tuberculose. Internat. Centraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1918. 26) **Reinhold Naefler**, Über den Blutdruck bei Lungentuberculose. Internat. Centraltbl. f. d. g. Tuberkuloseforsch. 1920. 27) **H. Schulte-Tiggel**, Die Beziehungen des Herzens und der Gefäße zur Lungentuberculose und ihre Tuberkulosenkrankungen. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. Bd. 21. H. 3, 1923. 28) **Blomne**, Blutdruckmessungen bei 500 Fällen von Lungentuberculose. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1921. 29) **Lesdijck**, La tension artérielle chez les tuberculeux pulmonaires. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1922. 30) **D. Palacios**, Der Blutdruck bei Tuberculose. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1924. 31) **Carditis u. Farrantola**, Contributo allo studio del valore di alcune ricerche nella prognosi della tuberculosi polmonare. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1924. 32) **Steham**, Prognostische Bedeutung des Blutdrucks bei tuberkulösen Frauen. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1925. 33) **Crofton**, Prognosis of Pulmonary Tuberculosis. Milit. Surg. Bd. 50. No. 1, 1922. 34) **Oliver**, Lungenblutung und Blutdruck in ihren gegenseitigen Verhalten. Zeitschrift f. Tuberculose. Bd. 41, H. 6, 1925. 35) **Schkljor**, Über den Blutdruck bei Lungentuberculose. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1925. 36) **Franco**, La tensione arteriosa nella tuberculosi polmonare. Zentraltbl. f. d. g. T. B.-forsch. 1925. 37) **Wehrrauch**, Über die Einwirkung des Tuberkulins auf dem Blutdruck Tuberkuloser. Beiträge. z. Klin. d. Tuberk. Bd. 27, 1915. 38) **Schmitter**, Klinische Beobachtungen über das Verhältnis des Blutdrucks während der Lungentuberculose. Beitrage. z. Klin. d. Tuberk. Bd. 23, 1912. 39) **St. Galecki**, Puls und Blutdruck bei Lungentuberculose. Beiträge. z. Klin. d. Tub. Bd. 4, 1905.

總括

- 一、肺結核患者ノ血壓ハ一日中ニ於テ時刻ニヨリ昇降動搖ヲナスモ、午後ノ晝間ニ高位ヲ示スモノ多シ。
 - 二、肺結核患者ノ血壓價ハ日ニヨリテ可成リノ差異ヲ示セリ。
 - 三、夏期血壓價ノ低下ヲ示スモノアリ。
 - 四、肺結核患者ノ血壓ハ合併症ノ存在ニヨリテ異常ノ亢進ヲ來スコト有リ。
 - 五、肺結核患者ハ月經來潮ニ關連シテ必ズシモ常ニ特殊ナル血壓動搖狀態ヲ示サズ。
 - 六、肺結核患者ニ於テ血壓ニ關與スル事項ヲ參酌シテ其ノ成績ヲ考察スル時ハ肺結核患者ノ豫後判定ニ資スルコトヲ得ベシ、血壓低下セル者程豫後不良ナルヲ以テナリ。
- 本研究ニ對シ御指導ヲ賜リ、又御校閲ヲ辱ウシタル東京市療養所長田澤博士ニ對シ深厚ナル謝意ヲ表ス、尙檢索ニ當リ種々ナル御援助ヲ與ヘラレタル東京市療養所遠藤副所長竝ニ醫局諸兄ニ深謝ス。